

永井愛の傑作戯曲が、約10年の時を経て今ここに甦る。

女優・黒木華が演じる、日本初の女性職業作家・樋口一葉の半生。

取材・文：横川良明 撮影：峰田達也 ヘアメイク：外丸 愛 (SOF) スタイリスト：高品遼実

24歳で夭折した女性作家・樋口一葉の半生を、日本を代表する女性劇作家・永井愛が描いた『書く女』。06年の初演時に喝采を浴びた傑作が、ついに再演される。今回、樋口一葉を演じるのは、若き演技派・黒木華だ。

「お話をいただいたときは、大丈夫かなって思いました。(初演で一葉を演じた)寺島しのぶさんのイメージが大きくて、本当に自分にやれるのか不安でした」

そう率直に胸の内を明かしながらも、その瞳に迷いはない。

「フライヤーの撮影をしたとき、初めて永井さんとお話しさせていただきました。実は撮影で使った書斎は

永井さんの書斎なんです。永井さんは読まれている本も圧倒的に多いし、知識も膨大。私の知らない世界をたくさんご存知の方。とてもチャームングなんですけれど、どつしりされている。永井さんご自身が、一葉っぽいと思いました。永井さんに引っぱっていただきながら、寺島さんの真似ではない一葉になれば」

再演では、効果音を舞台上のピアノの生演奏で表現する演出が新たに取入れられる。

「そついつた演出の舞台を観たことはありますが、自分がやらせていただくのは初めてです。どんなふうになるのか、私自身が早く観たいって思っています」

若くして家計を支え、小説のために恋をも捨てた一葉。その生き方は、同年代の黒木の目にどう映るのか。

「自分が何をしたいのかわからなくて迷う人も多い中、すごく意志があつて、カッコいいですね。これだと決めたものに突っ走っていくところは私と一緒にしません」

短い生涯ながら、最後の14ヶ月で数々の名作を書き上げた一葉。命を燃やすようにして才能を焔めかせた生き様は、多くの人の胸を打つ。

「時代は違いますが、難しい話では一切ありません。むしろ一葉の生き方は今の女性の方が共感できるところが多いのでは。私の年齢ぐらいになると、結婚したり出産したり、その中で仕事を続けたり。昔に比べて選択肢が広がった分、自由がゆえの責任を感じながら生きている。きつと一葉に共感できる場所もあるんじゃないでしょうか。そんなところも含めて、たくさんの人に楽しんでもらえる作品だと思います」



作家・樋口一葉の半生を舞台化。一葉役に今最も注目を集める俳優・黒木華をむかえ、師への恋心、青年文士・家族・友人との交流を創作のエネルギーとして昇華させ自立していく姿を、作・演出の永井愛が現代に蘇らせる。

作・演出：永井 愛 作曲・ピアノ演奏：林 正樹

出演：黒木 華 平 岳大 木野 花
朝倉あき 清水葉月 森岡 光(不思議少年) 早瀬英里奈 長尾純子
橋本 淳 兼崎健太郎 山崎 彬(悪い芝居) 古河耕史

日：2016年1月21日(木)～31日(日)※他、地方公演あり 場：世田谷パブリックシアター
料：1F・2F席6,000円 3F席4,000円 ※他、各種割引あり。詳細は団体HPにて(全席指定・税込)
HP：http://www.nitoshia.net/kakuonna2016/
問：二兎社 tel. 03-3991-8872(平日10:00～18:00)

先着限定！ 1F・2F席6,000円 ▶ 5,500円！

申込方法 予約時に「カンフェティを見た」と申告。 ぶれいす tel. 090-2663-2014
発売中

カンフェティ チケット 書く女 検索

PROFILE

黒木 華(くろき・はる)／1990年3月14日生まれ。大阪府出身。10年、NODA-MAP『表に出るいっ！』でヒロインオーディションに合格し、中村勘三郎氏と野田秀樹氏との3人芝居で銀賞を受賞。14年、『小さいおうち』で第64回ベルリン国際映画祭にて銀熊賞を受賞。日本の女優としては史上4人目にして日本人最年少の快挙に、大きな注目が集まった。以降、NHK連続テレビ小説『花子とアン』や『天皇の料理番』など数々のヒットドラマや、『霧が上がる』『ソロモンの偽証』『母と暮せば』など話題の映画に多数出演。舞台作品には、14年6月に上演された『赤鬼』以来、実に1年半ぶりの出演となる。

